2000・下水文化研究フォーラム〝これからの人と水とのかかわり〟

講演(3)・歴史的水流『四ツ谷用水』の復活に向けて

佐藤　昭典

まずお配りのレジメに一通り目を通していただいてから、OHPの方ご覧頂きくという順序で参りたいと思います。その前に、こういう機会をお与え頂きました酒井先生をはじめ運営委員の方に御礼申し上げます。

〝はじめに〟というところにありますが、かつて四〇〇年ほど前から仙台の城下町には四ッ谷用水という水流が流れておったわけであります。その四ッ谷用水とはどういうものかということですが、広瀬川が非常に深い谷を作っており、その河岸段丘地に開かれたものですから、仙台という町は非常に水利の便が悪くて、四つのトンネルを掘り、四つの谷を渡って町中に水を導入したということであります。

その規模ですが、本流は幅が数メートルぐらいの規模があったわけでありますが、町中の堀は幅三尺とか深さが二尺という規模であったということであります。これは仙台藩の直轄管理でありまして、受益者負担の原則で藩と町方とその水下の農民とが三分の一ずつを負担していたわけであります。

その四ッ谷用水の役割につきましては、他の

近世の城下町の用水の役割とあまり変わりませんが、特色としては、この流れが非常に速いために町なかに水車があったことです。我々の調べで一六箇所、県庁とか市役所のそういう中心市町地にあったのであります。ご案内のとおり江戸は多摩丘陵、大阪は生駒山脈のふもとに水車群があったわけですが、仙台では町の真中にあったということであります。

この四ッ谷用水は、動力の近代化までの仙台の産業なり人々のなりわいを助けたわけです。しかし、明治維新により、管理者である仙台藩が消滅するために、非常に用水の管理が混乱するわけで、新たな明治政府によって、明治六年県令が参りまして、町中堀は交通に不便だということで、裏堀として町裏に回されました。これが原因でコレラ・チフス等が発生したわけであります。

バルトン先生がおいでになりまして、下水道の基本構想をたてられました。そして四ッ谷用水の排水路、排水という機能を受け持って、仙台市下水道が我が国三番目の近代下水道として、明治三二年下水道法施行の前の年に着工致したわけであります。そしてこの四ッ谷用水は、昭和の始めまで約四〇年の間に市民の目から次第に姿を消していったわけであります。現在は本流だけが暗渠となりまして工業用水と農業用水の共管施設として昔のままのルートで地下を流れているわけであります。

四ッ谷用水（慣行水利権毎秒〇・五五トン）が都市化の波に押されまして、平成一〇年頃から四ッ谷用水を使用する水田は皆無になったわけでありまして、ここにおきまして水利権の扱いの問題が、クローズアップされているわけであります。

私の時代にこの四〇〇年続いた歴史である水利権を消滅させていいものかどうか、という問いかけを各行政当局にも続けているわけであります。

私事で恐縮なんですが、一九七三年（昭和四七年頃）東北で最初の流域下水道発足させたり、いろいろ下水道に関わっておりました。その関係から、すでに人々やお役所からも忘れ去られているこの四ッ谷用水というものは、仙台市下水道のルーツであるということをもう少し知って頂きたいという思いから、昭和六〇年に『「もう一つの広瀬川」－四ッ谷用水のすべて－』という小冊子を出版いたしました。これが、マスコミ等に取り上げられ、予想外の反響がありました。その反響の結果として市民の有志が集まり、四ッ谷用水研究会というものが発足したわけであります。しかし、この用水は先ほど守田先生が言われた水の文化、川の文化に非常に密接な関係があることから、「仙台・水の文化史研究会」と会名を改めて今日に至っています。ほとんど会員数変わらず四七名ということで、まもなく一二年目を迎えることとなります。

この研究会におきましてはここに述べましたように、いろいろな研究、先ほどの鈴木先生が非常に難しい文書をお読みになったようですが、我々も古文書を探し出すなど、いろいろなデータを解析して資料を集めたわけであります。

講演もいろいろな行政当局あるいはマスコミ等のお力添えを頂きまして八〇回位に達していると思われます。また、行政への提言を継続的に行ったわけであります。仙台市では私の著書に対しまして、将来の都市景観に非常に大きな影響を与えるということで、都市景観賞なども

下さりました。

そして仙台市におきましては、平成八年に仙台市環境基本条例というものを定めまして、その第八条に水環境基本計画を作るということが条例で定められました。その行動計画として個別計画である仙台市の水環境プランとか、あるいは仙台市の二〇〇〇年を目標とする基本計画とか、いろいろな長期計画に盛り込まれたわけであります。特に水環境プランでは「…四ッ谷用水などかつての仙台の原風景を形作った水辺を復活・保全していくための事業を検討しております。市民団体との情報交流を図りながら候補地のリストアップなど…」と記述されているわけであります。会発足九年余という長い歳月を要したわけでありますが、「仙台・水の文化史研究会」の活動のうち、「四ッ谷用水」についての研究と行政への提言という役割はほぼ目的を達成した状態となったわけであります。

そこで、新たな市民活動団体を作ることとなったわけであります。今年の二月六日に市民約四〇名の方々の参加を得て発足いたしたわけですが、その前の年から準備会を四回も重ねていろいろと慎重な準備を行ってきたわけであります。

「四ッ谷用水の会」では、毎月のようにミニ・シンポジウムや講演会あるいは現地見学会などを行いながら、会員数も九十名を超えているわけであります。九月末には用水復活場所の検討委員三〇余名の方に参加を頂きまして、ワークショップ、いろんな意見を出して頂いて今私のところでまとめているところです。それを要約いたしますと、約四〇〇年前伊達政宗は水との関わりの難しい広瀬川に代り、新たに町中に水を導入することによって、町と人の関わりを成

立させたわけであります。私共もこの用水復活によりまして、環境・防災といろんな用途がありますけど、やはり〝もう一つの広瀬川〟といたしまして、市町中心部で川と都市、人と水との関わりの再現を目指したいということであります。

それでは、ＯＨＰをご覧頂きたいと思います。

【ＯＨＰの説明】

仙台の概況。これが河岸段丘地、最も下のほうを広瀬川流れております。その他城下町の外で梅田川という二級河川、小さな河川が流れているだけです。段丘地は急に沖積平野になります。城下町は三回にわたって拡張されましたが、いずれもこの段丘地域を出ることはなかったわけであります。（図－１）

図－２が「四ッ谷用水」でありまして、ここから取水してトンネルを掘りまして、町なかをオープンカットで流れる。これが本流で梅田川と広瀬川をつないでいるわけです。ここにあるのは道路ではありません。全べて水路でありまして途中切れているところがありますが、資料の裏付けのある部分だけを画いたということであります。導流部分が約三・二キロメートル、町なかが四一キロメートル、合計で約四四キロメートル、広瀬川の延長とほぼ同じでございます。

図－３はその段丘地の断面図であります。四段の段丘に分かれております。一番古いのは洪積世（更新世）一三万年前、一番低い下町段丘は一万九千年前の形成とみられます。ここに広瀬川がながれ、高い河川崖を作ってすばらしい景観を呈しているわけであります。それでこの表土の下には、扇状地性段丘礫層が相当厚く分布しております。これを水土条件と言い、風土

とは異なり、水と土との織り成す条件といっているわけであります。

図－4は南東方向に相当傾斜いたしております。四ッ谷用水はこの部分を直角に向こうの方に流れている。この辺は標高五七メートルでしょうか、これから分岐した支流は相当の急流で水車を回す力もあったということであります。

写真－1は大正時代の本流であります。これは今の東北大農学部の前でありますし、写真－2は、もうちょっと下流の小学校の前であります。屋敷割が非常に大きかったので、用水から庭池を作った家が多かったようです。ここは大きな屋敷で舟まで浮かんでいるわけです。これは、ひとつの初期消火用水であったと思われるわけであります。

大正時代ですね、さて、四ッ谷用水の排水機能の部分をうけて下水道が着工するわけですね。写真－3はその工事現場、写真－4はここに暗渠となってできあがったところです。私はこの写真に写っている両方の木をよく見てくださいと話します。四ッ谷用水の豊かな水環境がその屋敷林の生育を助けまして、のちに仙台は「杜の都」といわれる原形をすでに大正時代に作っているわけであります。

北二番町というところで、一〇年以上前に藩政時代の水路跡が発見されました。冒頭に申し上げましたように幅三尺、深さ二尺というそのとおりであります。六〇センチメートルですね。それで相当にしっかりした石積みで積まれております。もう三〇〇～四〇〇年位近く長い間マウンドアップされた道路舗装面の下になっていたわけであります。

この知らせを受けまして私もタクシーで飛んでいったわけですが、そのときはもう産業廃棄

物として運ばれてしまっていました。我々が復活するのには、もちろんこれが有力な証拠になっているわけであります。それで侍屋敷は北側三分の二のところに設けられたという記録があるのです。それは騎馬隊が通るために片側によせた。まったくこれが三分の二のところを通っているということであります。

現在は工業用水並びに農業用水となりまして、蓋かけられまして町裏を流れてかろうじてかつて水路があった面影を留めているという状況であります。

我々は、何度もシンポジウムを開いたわけです。その都度、マスコミ等が記事で応援いただいて盛り上げて頂いているわけであります。本当にもう全部舗装になりまして、雨水浸透がしなくなった、どうする仙台！ということで巨大な仙台市の下水道管に私が新聞記者と入っていろいろと説明したこともあります。

地下水の枯渇によりまして、仙台のケヤキも夏バテであり、仙台もヒートアイランド現象が心配されるといった環境になってきているわけであります。

そこで私共は、町に水辺をということで、旧四ッ谷用水本流のうち、役割を終えた農業用水の水利の転用のほかに、下水道に入っている地下鉄の湧水なども利用して、中心市街地に水環境或いは防災水路として、都市内に水路網を形成して、そして広瀬川に戻してやりましょうというのが四ッ谷用水の復元なのであります。

図-5に、いろいろな効果を並べてありますが、水車が回る町、うるおいのある都市環境、地下水の涵養、ヒートアイランド、災害時の防災用水、水と杜の都の再現、池沼の再生と創出と効果についての資料を大量に関係機関に理解

を深めていただきたく配布致しました。そして、市民の会の結成の運びになったわけであります。

そのときの新聞報道では、開府四〇〇年を記念し、有志二五人となっています。会名は、私どもは「四ッ谷用水復活市民会議」などという名前を考えていたのですが、中学生のお嬢さんが出された原案をもとに、現在の会名になったわけであります。帰られた方もおりますが、最後まで残って記念写真に写った方が三〇余名ですか、ということで出発したわけであります。(写真-5)

会の活動ですが、まず準備会を開きました。ここで、いろんな資料を集めてとにかく発会までに、四ッ谷用水のことを良く理解していただくということに時間をかけたわけであります。発足してからの現地見学会では、雨でしたがたくさんの方に集まって頂きました。そして、「復活箇所選定委員会」というものを開きました。四つのグループに分かれて、非常に熱心な議論がいくつも出たわけであります。私が前から考えていた広く市民の意見を聴取して案を作るという、ひとつの峠はここで越えたということになるわけであります。市民の方から、例えば、街路樹が二列になっている幅広の歩道に幅一mの水路を通してうるおいをもたらしたらどうかという提案がありました。また、大きな公園の真中に水辺がないので、この中を通したらどうかという提案もありました。そのほか、今は暗渠となっていますが、四ッ谷用水の本流には、大崎八幡という国宝の神社のところに橋が架かっておりまして、藩政時代から大正時代まで水路が流れていたのです。ですからここを復活したらどうかという提案もあります。

私共がイメージにおいていますのは、例えば札幌の知事公館の庭の水辺ですが、コンクリートなどを用いないで、自然的なネイチャーデザインと申しますか、そういう形のものを頭の中においているわけであります。

さて、広瀬川は一〇〇万都市を流れる清流ですが、また伊達政宗が城の外堀としてこの広瀬川をよりどころとして選んだだけあります。この川はなかなか素晴らしい自然はありますけど、人々が容易には近づけない区域もあるわけであります。そこで、親水ということで、人の集まるところをつくってカラフルなインターロッキングの広場を作るにしても限界がある。自然性を次の世代に引き渡していくためには、人工的な物を作るのには限界がある。ということが市民の大方の認識でもあるわけであります。

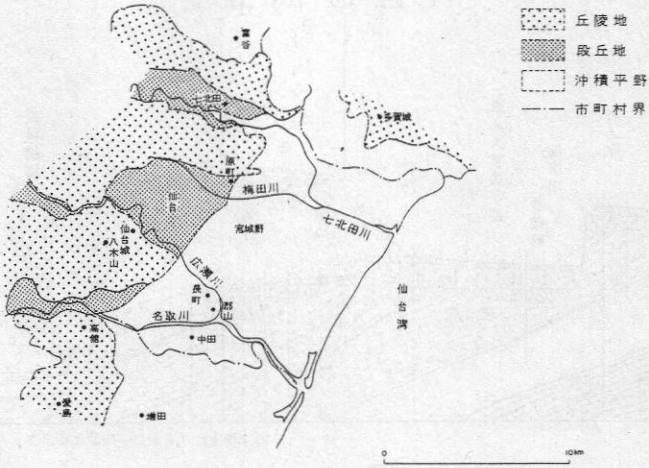
広瀬川には、すばらしい五〇mという高さの崖があります。地質学の標本的なものであります。ここまで市民がわざわざ出かけて行くという機会も少ないわけであります。そこで私共は町中にもう一つの広瀬川を呼びこむことによって、そこで水に親しんで頂き、リラクゼーションと申しますか、憩いの場なり、心安らぐ場を作るという効果も狙っているわけであります。わざわざトンネルを掘るわけではありません。先ほどのように本流は市の中心部のやや北寄りを常時流れているわけでありますから、そこから若干ブランチしまして、町中を流して広瀬川に戻してやるということであります。本当にプランクトンを含んだ水が町中を流れ小魚の泳ぐ姿を見れば、子供さん達にも親しまれ、また感性空間としての役割も成すのではないかというふうに考えられるわけであります。ＯＨＰは終わります。

以上、私が小さな本を出版して、そこで四ッ谷用水の復活を提起してからすでに一五年、調査を始めてから二三～二四年、水の文化史研究会を作ってまもなく一二年になろうとしているわけであります。最初は署名運動しようとか、それから市に押しかけようとか、非常に熱心な協力者の方がおりましたが、私共はまず市民にこの史実と効果と、そして仙台市の今の水環境の現状というものを考えて頂こうと、それに時間を費やしながら、やはり行政への提言を続けながら、とにかく時間をかけてやっていこうということであります。例えば、八幡町では八幡町の町づくり委員会というのがありまして、そういう町内組織ともリンクしながら節目にあたる二〇〇三年を目標に、この用水の復活を図りたいというふうに考えております。

ご来場の皆様方の今後とも御支援と御指導をお願い致しまして、御清聴感謝申し上げまして、私の話を終わりたいと思います。

（平成一二年一二月一日）

仙台附近の地形



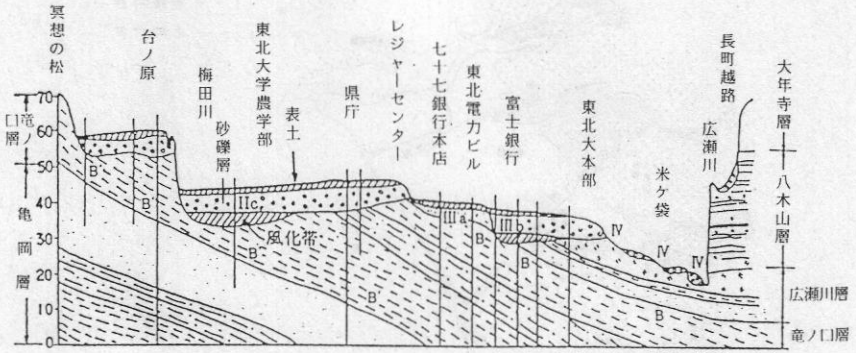
図－1

藩政期の四ツ谷用水

(1991：佐藤昭典)

図－2

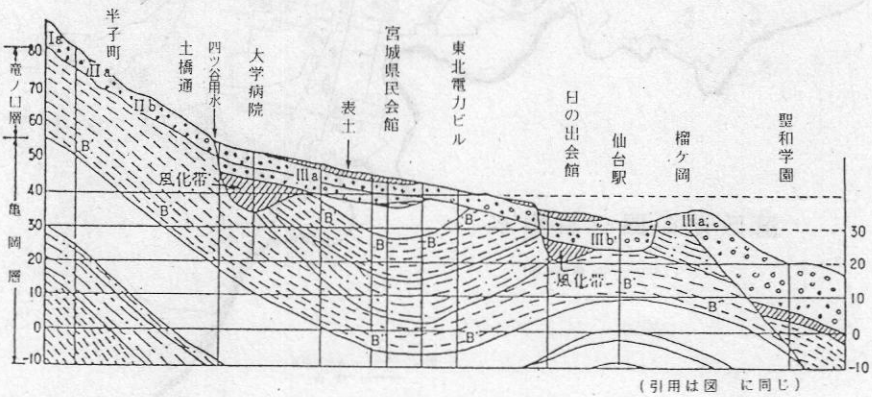
台原 —— 米ケ袋
（ほぼ南北）



奥津春生氏「大仙台の地盤と地下水」より

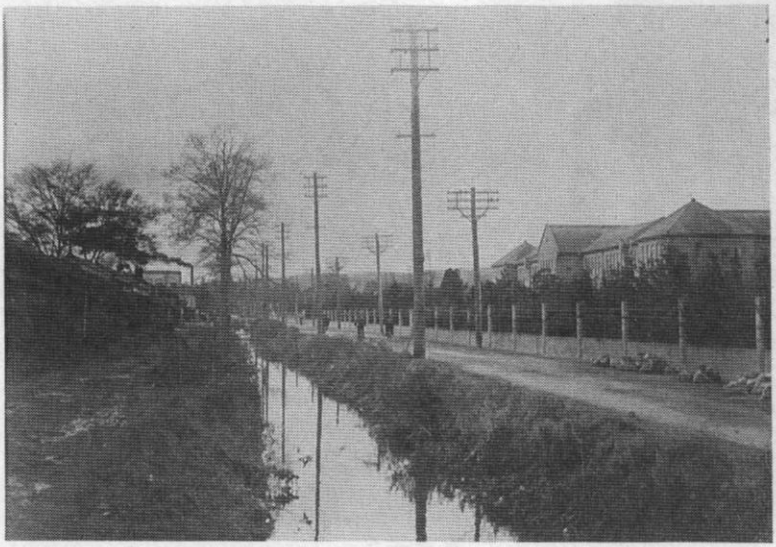
図—3

大学病院 ～ 仙台駅
（南東方向）



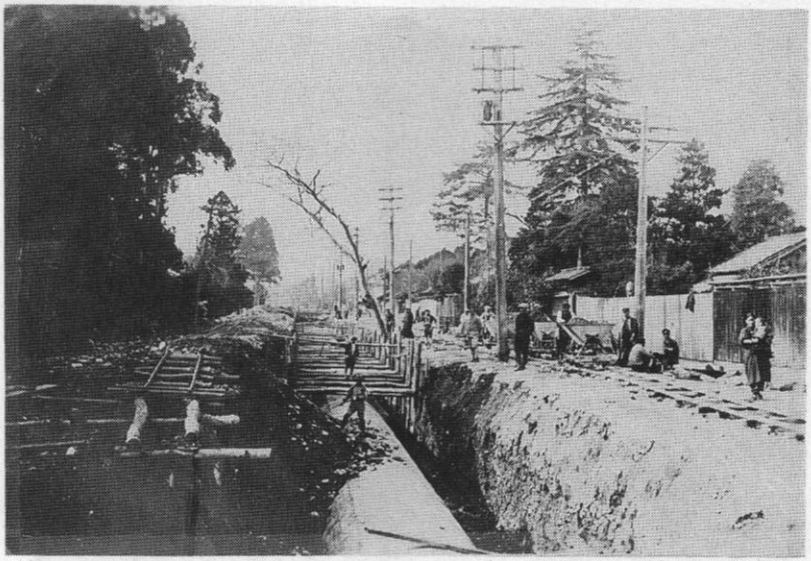
（引用は図　に同じ）

図—4



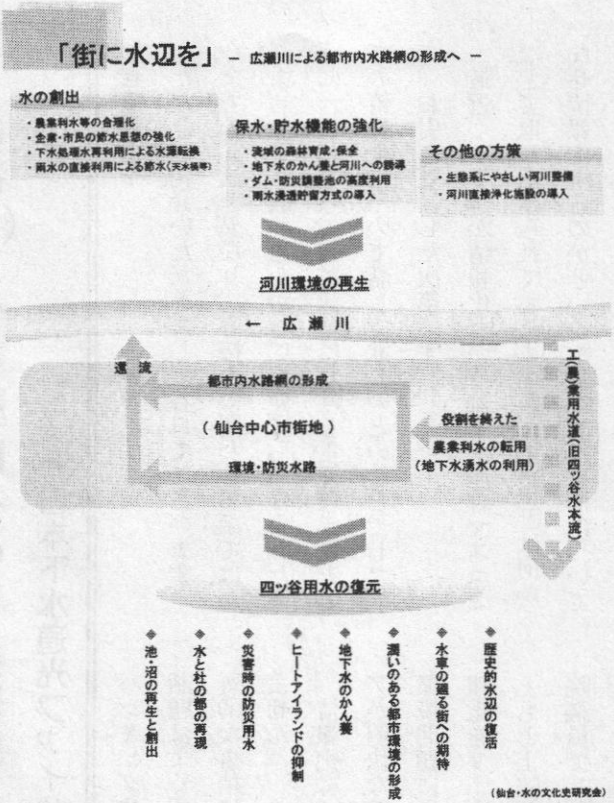
写真ー1

写真ー2



写真ー3

写真ー4



図－5

写真－5「四ッ谷の水を街並みに！」市民の会　発会